



近江の裝飾經

滋賀県立琵琶湖文化館
主査 土井 通弘

裝飾經とは金・銀や色紙など様々な技法で美しく装飾された經典をいいます。經典は言うまでもなく、釈迦の教えを後世の人々が記録した書物ですので、經典の一字一字を正確に写すことが写經の本来の目的です。ただ信仰者にとっては經典の字が単なる意味を伝達する記号ではなく、永遠の釈迦そのものであったのです。それは写經をする際に、一字三札という作法があつたことでも理解することができるでしょう。つまり、經典の字は仏そのものであり、一字書く毎に仏を礼拝することが經典を写す行為の本義であったのです。

したがって、經典の字を仏とみる意識は、自ずと写經の莊嚴化へ向かう道程を示していたと考えられます。經文を写す紙（これを「料紙」という。）や墨・硯・筆を作る技術の発達や書の展開は、写經の活発化と離れては考えられないと言っても過言ではありません。經文を写すという文化一意識一は、様々な工芸技術の発達や美意識を高めることにつながり、その結果さらにより装飾性の高い經典が作られることにつながったのです。そして、何よりも多くの經典自体が、その經典を護持し莊嚴することを説いており、前述の活動をより活発化させていくことになったのです。

さて、わが国においては、装飾性の高い經典の出現は奈良時代から知られています。料紙を紺色に染めて、銀泥で華嚴經というお經を写したものの（東大寺ほか）や、紫色に染めた料紙に金泥で金光明最勝王經を写したもの（徳川美術館ほか）が残されています。また、京都市の青蓮院には淡紫色に染めた麻

の繊維で漉いた料紙に金箔の微細な小片を全面に撒き、その上に解深密經を書写した經典が伝来しており、奈良時代の莊嚴化の実態がよく知られる作例です。

このような前史を経て、經典の莊嚴化がもっとも隆盛したのは平安時代です。この時代は京都の貴族たちが文化・美術の主導性をもっていた時代であり、貴族の耽美的感性が非常によく表われています。中でも平安後期の淨土教の流行は貴族たちに現世への無常観を譲成し、その結果往生極楽を願って、さかんに經典を書写しています。そして、經典を莊嚴すればするほど功德を増すと考えていました。

「經の御有様之もいはずめでたし。あるは紺青を地にて、こがね黃金の泥して書きたれば、金泥の經なり。あるは綾の文に下絵をし、經の上下に絵を書き、又經の中の事どもを書き現はし、涌出品の恒沙の菩薩の涌出し、ゆじゅつぼん寿量品の常住靈鷲山の有様、すべて言ふべきにあらす」

これは装飾經の歴史を語るとき、必ずといってよいほどに引用される、『栄花物語』の「もとのしづく」の一部ですが、装飾經の有り様が綴られた箇所として注目される一文です。なお、涌出品や寿量品とは『法華經』に出てくる品目です。平安期装飾經の歴史はこの『法華經』を中心に展開したことも忘れてはなりません。『法華經』は七巻本と八巻本に大別できます。わが国では八巻本が流布しますが、これに無量寿經（開經）と勸普賢經（結經）の二巻を合わせて、十巻一具として書写され

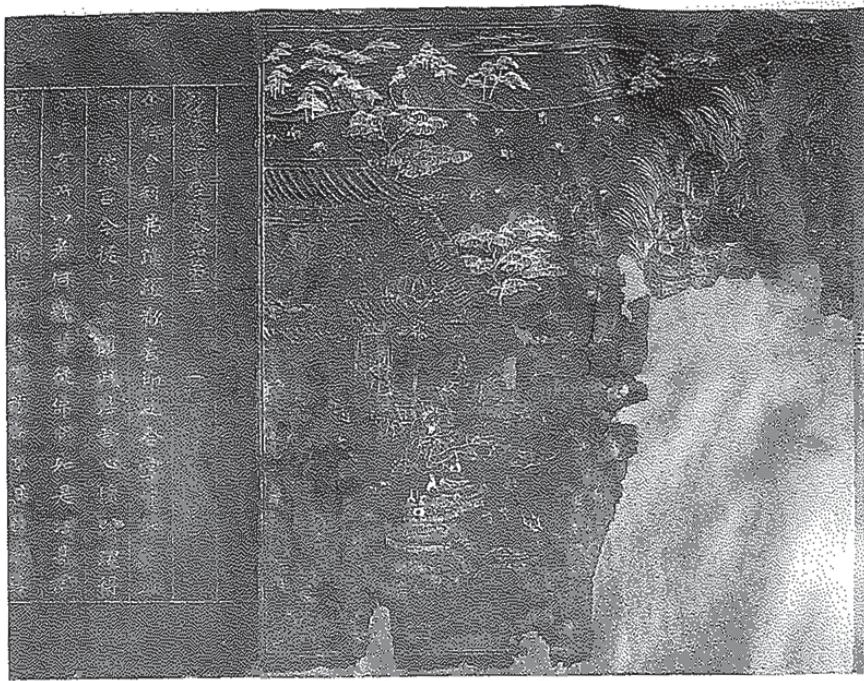


図1 (重文)大津市延暦寺蔵 紺紙銀字法華經(見返し)

ることが多かったようです。さらに『法華經』八巻の中に28品あることから、一品一巻に装丁して、開結合わせて三十巻一具として書写される場合もありました。各巻それぞれに趣向をこらして美しく装飾することで、宗教的充足感と美的興奮をもたらし、一時の救いを見い出だしたのではないかと想像されます。

以下では近江に伝来する幾つかの作品を紹介し、装飾経の歴史をたどることにしましょう。

図1は、延暦寺に伝来する紺紙銀字法華經八巻（重文）です。この経本は紺色に染めた料紙に金泥や銀泥（金粉や銀粉を膠水で溶かして描く）で装飾したものです。表紙は仏教文化の伝来と共にもたらされた宝相華唐草文を描き、表紙の裏（見返し）には各巻に説かれている経意を絵画化して表わされている（これを「経意絵」という。）表紙の宝相華文は大振りでゆったりとした霧囲気が感じられる一方、見返し絵は鉄線描が主となり、画面全体にピンと張りつめた緊張感が漂っています。経文は銀泥で書写され、やや小振りながら、非常に均整のとれた字の構えが見とれます。本経は、わが国で書写されたことが確実な他

の経典と比較しますと、かなり様子が違うことから、その出自を中国や朝鮮にもとめる考えもあります。いずれにしても、紺紙経としては優れた作品であると言えるでしょう。

図2は、栗東町の金勝寺に伝わる紺紙金字金光明經の一巻（滋賀県指定文化財）です。金光明經は本来四巻本であるのですが、三巻は失われ、今はこの一巻だけが残っています。この経典も先ほどの延暦寺のものと同じく、紺紙に金字で書写したもので、表紙は左端に経題「金光明經卷第一」

（これを「外題」という。）と金泥で書き、この外題の下あたりから、宝相華文の茎が上の方向へ二本、下方へ二本が伸び、さらに次々と枝分かれをしていきます。茎は描く孤は自然で美しいものです。花冠は6顆表わされていますが、同じ図様はなく、上を向いたり、下を向いたり、または花裏を見せたりと多彩です。宝相華は想像上の文様ですが、植物としての躍动感が生々と表現されています。紺紙経の表紙絵としては、これだけの表現力をもった作例は他にないといっても過言ではありません。見返しには、右上方に斜めを向いた如来が四人表現されて、頭上には天蓋があり、さらにその上に瓔珞（玉などを連ねた装飾品）が懸かっています。四如来の前には、布を掛けた供養台が置かれ、四如来に向かって合掌する二人の菩薩がいます。これは「序品」の経意を絵画化したもので、仏陀が王舎城で「金光明經」を宣説する様子を表現しています。四如来はこの経を護持する役割をし、二菩薩はその説法を聴聞しようと集まつた諸菩薩を代表して二人の菩薩が描かれていると考えられます。その他この巻に説かれる経意が画面全体に表現されていますが、特に注

目される点は、金・銀の使い分が非常に上手であることです。現状では銀の退色がすすんでいますので肉眼では確認しにくいのですが、赤外線写真を撮ってみると、銀泥が豊富に使われており、この絵画が描かれた当初の美しさはいかばかりかと想像されます。

図3は、愛東町百済寺に所蔵される紺紙金字法華經および開結經十巻（滋賀県指定文化財）です。この経典は、いつ書かれたかがわ

かる年記がありませんが、非常によく似た見返し絵をもつ京都・長福寺に伝来する紺紙金字光明經（重文）には「久安元年（1145）」の奥書きがあり、百済寺本もほぼこの頃のものと考えられます。本經典の特徴は見返し絵にあります。縦長の画面をほぼ三段に分かち、上段には遠山を配し、鷲頭の山様が描かれていることから靈鷲山であることがわかります。周囲にはリボンを結んだ宝棒（？）が天空

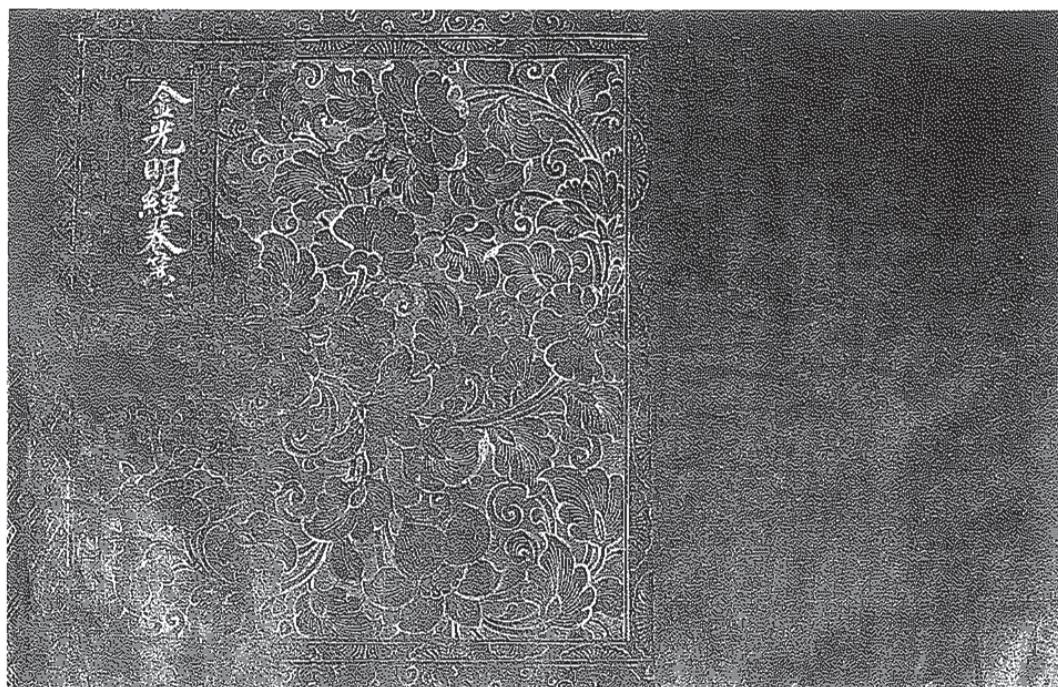


図2-1
(表紙)



図2-2
(見返し部分)

図2 (県指)栗東町金勝寺蔵 紺紙金字金光明經



図3 (県指)愛東町百済寺蔵 紺紙金字金法華經(見返し)



図4 (重文)秦莊町金剛輪寺旧蔵 紺紙金字大宝積經(高麗國金寺大藏經(見返し))

を飛んでいます。中段には説法印（手の形）を結んで坐る釈迦を菩薩・比丘衆が取り囲んでおり、靈鷲山で釈迦が『法華經』を説いた所をあらわしているのです。下段にはその教説に従い、様々な場面が収録されています。平安時代も後期、12世紀に入ると紺紙経の見返し絵の多くはこの形式のものが多くなり、一定の定形化が見られるようになります。画面全体の構図が安定し、非常に落ち着きのある様子が感じられる反面、自由さ、あるいは躍動感は失われ、硬直した感覚が全面で出てきています。これ以後の紺紙経の見返し絵は芸術性をなくして衰退し、簡略化していきます。

す。言いかえれば、このような見返し絵は平安時代の終焉と共に、その生命を終えたと言えるでしょう。

ここで目を転じて朝鮮半島の紺紙経の作例を見てみましょう。

図4は、現在京都国立博物館の所蔵になっていますが、見返しに嘉慶二年（1388）八月に権律師豪憲が金剛輪寺（秦莊町）に施入した朱書があり、古くから近江に伝來したことが知られる作品です。この経典は紺紙金字大宝積經卷第三十二（重文）ですが、経典の末尾に高麗の統和二十四年（1006）高麗史上著名な千秋王太后が寵臣の金致陽と同心して発願した紺紙一切経（仏典の総称）の一巻であることが書かれています。表紙には銀泥で牡丹唐草文を、見返しにはやはり銀泥で三軀の供養菩薩像が描かれ、天空にはリボンを結んだ楽器や散華が描かれています。また、本

文の金字は大振りで堂々とした楷書で書写されており、さらに今も金色の発色が非常によく、一字一字が丁寧に磨かれたであろうことがわかります。残念ながらこの時の一切経は金剛輪寺旧蔵のこの経本以外は伝来しませんが、この一巻は高麗仏教美術の優秀さを余す所なく表現した作品と言えるでしょう。

以上紺紙経を紹介していきましたが、次は料紙を美しく装飾した作品を取り上げてみましょう。

図5は竹生島の宝厳寺に伝来することから竹生島経（国宝）とも称される法華經です。雁皮紙（最高級の和紙）に金泥で界線を引き、

妙法蓮華經序品第一

如是我聞一時佛

大比丘衆二千人俱皆是阿難漢

盡無復煩惱遂得已利實諸有結心是

其名曰阿若憍陳如摩訶迦葉優樓陀

葉伽耶如葉那提迦葉舍利弗大目犍

訥迦栴延阿鞞跋致劫賓那憍梵波羅

多畢凌伽婆蹉薄拘羅摩訥

陀羅難陀富樓那弥多羅尼子須菩提阿

羅睺羅如是衆所知識大阿羅漢等復有學

無學二千人摩訥波闍波提比丘尼與眷屬

六千人俱羅候羅母耶輸陀羅比丘尼與

眷屬俱告薩摩訥八萬人皆於阿難多羅

三藐三菩提不退轉皆得隨羅尼悉說

轉不退轉法輪供養無量百千諸佛於諸

所殖衆德本常為諸佛之所稱歎以慈脩身

善入佛慧通達大智到於彼岸名稱普聞元

量世界能度無數百千衆生其名曰文殊師

図5 (国宝)びわ町宝嚴寺蔵 法華經序品(竹生島経)

平安時代中頃に完成された和様の楷書で美しく書写されています。それまでのわが国の楷書は中国、特に唐代の楷書を手本にしてきましたが、国風文化の芽生えとともに、書風もわが国独特の美が追求されるようになります。経典としてはその完成された書風の美を示す早い例が本経であると言えます。それに加えて、料紙の装飾として、金銀泥で蝶・草花・鳥等を全面に描いていますが、それぞれの絵が決して料紙である雁皮紙(「鳥の子紙」ともいう)の風合いや美しさをそこなうこともなく、さらに言えば経文に説かれる仏教世界の至福を謳歌する舞台装置として一寸の無駄なく、必然性をもって存在していることです。このような美意識は、十一世紀の作とされ桂本万葉集の意匠と共通するもので、料紙の美を相殺することなく、適切な絵が施され、書が写される作品として、平安貴族の美意識の到達点の一つとして、忘れてはならないものです。

一般に装飾経の最高点として、平清盛以下平家一門が発願し、広島の厳島神社に奉納された平家納経(1164年)を掲げる人が多いのですが、私の考えでは平家納経はすでに退廃の方向へ進んでしまっているように思われます。料紙やその装飾技法や装潢技術(一巻の経典に仕立てる技術)の個々を見れば、いずれも時代の最高点を表わすものかも知れませんが、仏典としての性格は過剰な美の洪水の犠牲になってしまっており、端的な例をあげますと、経文を写す墨が装飾された料紙の上に定着せず、流れている個所が数ヶ所も認められます。これでは仏典としての要素がないがしろにされてしまっていると考えざるを得ないです。それに比べ竹生島経の装飾世界は“仏”としての経文を莊厳するという経典としての前提が崩れず、装飾の総合性を維持しているのです。このような意味で、私は竹生島経を装飾経の最高峰として評価したいのです。

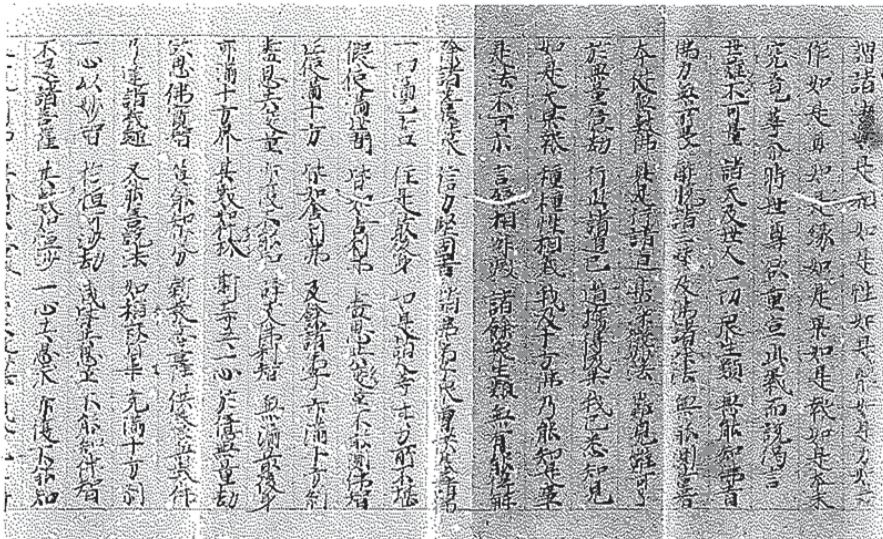


図6 (重文)大津市西教寺蔵 扇面古写経

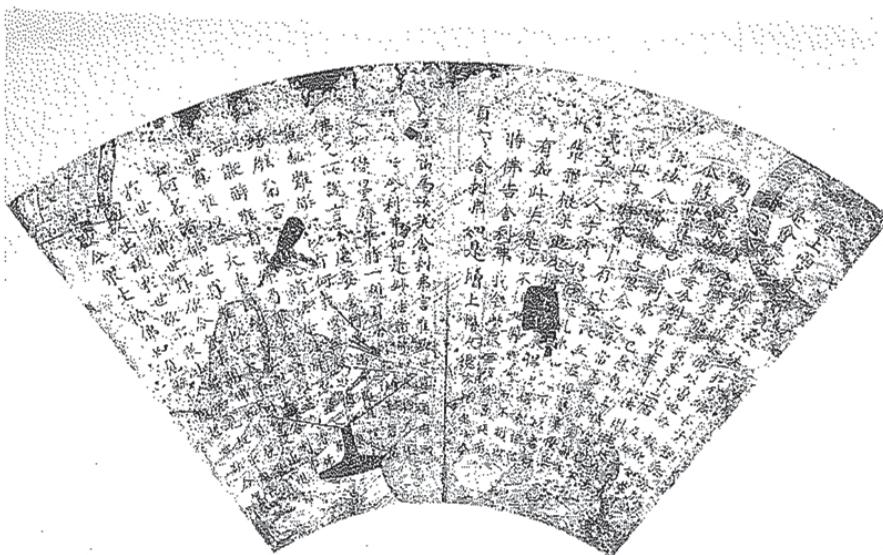


図7 (重文)大津市西教寺蔵 法華経(色紙金銀箔散)

次に大津市の西教寺に伝来する二作品があります。一つは、図6の色紙金銀箔散の法華経（重文）です。これは薄紫・濃崩黄・朽葉・白茶・白色の料紙を継ぎ、金銀の小箔を全面に散らして装飾し、法華経の経文を書写した作品です。この作品も平安貴族の美意識が遺憾なく發揮された作例と言えるでしょう。つまり、平安貴族たちの色の感性は、それぞれの色の鮮彩を極める一方、異なる色を襲ねることで、それらの色とは違った色を感覚で醸し出す^{かさね}文化を発達させたことはよく知られています。この襲の美意識が生かされているのがこの経典の特徴です。二点目の作品は

扇面古写経（重文）と言われるもので、扇の形をした料紙に冠を着した二人の男性が高杯をはさんで対坐し語り合う様を大和絵の技法で下絵を描き、その上に法華経の方便品の一節を書写しています。（図7）扇面古写経は大阪の四天王寺等にも所蔵されていますが、西教寺の分はそれらと元は一具のものであったことが知られています。それらすべてを調べても、扇形と貴族らの日常を描いた下絵と経文が一つの世界に統合された理由ははっきりしませんが、後世の私たちから見ると、貴族たちが息をする空気中に仏が偏在しているように見え、もしそうとすれば写経をし功德をつむ自分達が仏に見守られているのだ、あるいはそうでありたいという現世には決してあり得ないものを欣求していたように感じられるのです。

この扇面古写経が作られた頃
(12世紀後半) 源平という新

しい勢力の台頭を目の前にしてなす術を失った貴族達に内在する不安の結露として、このような装飾経が作られたと考えることも可能なではないでしょうか。